



Title	イギリスの国語教育
Author(s)	神津, 東雄
Citation	語文. 1951, 4, p. 46-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

イギリスの国語教育

神津東雄

チヨン・スチュアト・ミルの「自叙伝」には、三歳の頃から、父

にギリシャ語を教へられたことが書いてある。当時（といふのは、一八〇六年の頃）希英辞典がなかつたので、父と同じ机で勉強しながら、意味の解らない語が出てくる毎に、父に質ねつゝ読んで行つた。その外、毎晩算術を習ひ、又英語の歴史本を読まされた。英語の綴りなどは、何時覚えたのか、全く記憶に残つてゐないと語つてゐる。

三歳の児にギリシャ語を教へることは、如何に非凡な親子であつても、非常識であらう。たゞ、注意すべきことは、我子の教育にあたつて、特にギリシャ語から始めたといふ、あの誠実な学者ヂニームズ・ミルの、古典語教育に対する信念である。これは彼一個の突飛な思ひ付きではなかつた。

母国語などといふものは、綴字法でも一通り教へれば、あとは古典語の知識で、読み書きは自在に出来る。否、古典語の知識なくしては、立派な英文は書き得ない。古典語こそすべての規準なのだ。精神の陶冶は古典語と数学によつて行はれる。かういふ、ルネサンスのヒューマニスト達の教育理念が、伝承されてゐた。

一八三三年、エマソンがイギリスを訪れて、オクスフォードやケン

ブリッヂに見出したものが、同じ理念であつた。彼はいふ。

「この大学教育で得られる結果といへば、ギリシャ語とラテン語、それに数学の根本的知識を授けられ、あるひは地道で味のあるイギリス批評精神を教へ込まれる。かういったやうな知識を得たらといって、何の得があるかは別として、イートンの級長でも、長短の音節も正しいラテン語の詩が書けるし、……後期の学生なら『古典詩華集』を、一字も間違へず誦誦できる……」

「全体がギリシャ学の空氣につゝまれてゐる。ギリシャ人の精神に接して、趣味の水準は向上する、思想は豊富になる。……ギリシヤ人が、黙々と無数に、自分を取巻いてゐるので、イギリスの作家はこれを無視することができない。言葉を慎み、筆を振る。イギリスの新聞の調子と文体とは、こゝから生れてきたのである……」（エマソン著『英國の印象』加納秀夫氏訳）

勿論、この頃には、ケンブリッヂにもオクスフォードにも、英語古典文学の講座はなかつた。

とは云へ、國語尊重、國語教育の重要性を説く熱心な論者も、まんざら無いわけではなかつた。しばらく昔にさかのばつて、イギリスに於ける國語教育の伝統らしいものを、さぐつて見よう。

一〇六六年のノルマン征服このかた、上流支配階級の通用語となつてゐたフランス語も、十四世紀の半ばを過ぎると、勢力を失つた。議会や法廷でも、英語が用ひられるやうになり、やがて、シェークスピアの頃となつて、民族意識の高揚とともに、空前の英語文化が開花すると、国語教育の必要を認める者が、ボツ／＼現はれて來た。マルカスター（一五三〇—一六一）は、学校教育を論じて、ラテン語に先立つて、英語のリーディングを教へるべきだと主張した。ロージャ・アスカムをはじめ、エリザベス朝の有識者の中には、英語が表現の具として優れてゐることを、力説した者が渺々たる。イギリス・ルネサンスの絶頂であるエリザベス朝が過ぎて、法則秩序を重んじ、reasonを尊ぶ時代に入つてくると、国語問題にも、一層の関心がもたられるやうになつた。英語の亂脈が目に付いて来た。かういふ、綴字といひ、文法といひ、規準もなく、統制もなき、でたらめな国語をこのまゝ放置するならば、遂には国語の無政府状態を來すであらう。英語を純正なものにし、規準となるべき用法を定め、ラテン語のやうに固定しなければならない、といふ意見が、次第に有力となつて來た。

先進国のフランスやイタリーには、すでにアカデミーがあつた。それになつて、イギリス翰林院を設立しようといふ議が、もちら上つた。ドライデンやイーヴリン、やゝ降つてはデフォーやスキットのやうな文豪が、熱心にこれを唱導した。こんなわけで、国語問題

に対する世人の関心は、著しく高められ、十八世紀以後、国語の正用誤用に関する、盛に論議がかはされた。しかし、アカデミー設立に対しては、イギリス人の自由を尊ぶ氣風に合はないし、また、言語は固定できるやうなものではないといつて、デヨンソン博士をはじめ、多くの反対論者があり、結局、今日に至るまで設立を見ない。ドイツの英語学者フランツディーカは、イギリスに於けるアカデミーの思想を跡付けて、これが設立を見なかつたのは、英國民の非合理性のためであると結論してゐる。

ところが、英語を純化し固定しようといふ要望は、一人の保守主義者の辞典の出現によつて、殆ど達成されることになつた。一七五五年、ジョンソン博士の英語辞典は、刊行されるや直ちに初版が売切れたほど、熱狂的に歓迎され、これが後の世の英語に甚大な影響を與へた。この結果、英語の綴字が固定し、ラテン語ばかりの文章がはやるやうになつた。

この時代——十八世紀後半——になると、ある私塾に於ては、少年少女に本国の文学作品の抜粋を読ませてゐるところがある。英文学を講ずる先生も現はれるやうになり、学校用の英文法テキストも刊行され始めた。

十九世紀に入れば、ロマンティズムの勃興とともに、本国の文学、特にエリザベス朝文学に対する一般の興味は著しく高まつた。とはいへ、学校・大学に於て、英語・英文学が眞面目に研究されるやうになるのは、この世紀の後半に入つてからのことである。教育界の大勢は、依然として、古典第一主義であった。グラマ・スクール（中学校であるが、名称の示すやうに、元来、古典語の初步を授けるところであつた）では、十六世紀にシェークスピアが戲曲化し

た村塾に於けると同様に、相も変わらず「アモー、アマース、アマット」と「ラテン語文法の変化表を、大抵は英語訛りで、暗記することが日課であった。

実は、それで、大した不都合も感せられなかつたのである。なぜならば、グラマ・スクールから、ケンブリッヂ・オックスフォードに進学するやうな学生は、多くが上流階級か、知識階級の出であつて、学校教育の欠陥は、他で十分に補ふことが出来たからである。

一八三二年の改革法令によつて、イギリスの普通教育がはじめて組織化され、庶民の子弟にも教育が普及するやうになるとともに、英語は漸次、カリキュラムの中で重要なものになつて來た。しかし、これは、はじめから国語教育に特別の意義が認められたためではなかつたやうである。むしろ、やむを得ず、古典語教育の予備乃至代用に、英語が持つて來られたのであつた。

教養ある限られた家庭の子弟の教育ならば、ラテン語ギリシャ語の文法の訓練だけやってゐても、教育の目的はある程度まで達せられる。しかし、比較的教養に乏しい家庭の子弟を、国家が一樣に教育しようとするに当つては、古典一本による躰け教育が不可能なのは言ふまでもない。

ところが、一八三二年の改革法令を制定した政治家達も、カリキュラムを起草した学者も、教育家も、その大多数は、古いグラマ・スクールの教育を受けて來た連中であった。普通教育に国語を授けるといつても、別によい智慧があつたわけではない。いきほひ、新しい小学校の国語教育は、ラテン語文法の階梯を、そのまま英語に移しただけのものとなつた。すなはち、スペリング・ブックによつて英語の綴り方を教へた後、文中の単語の品詞を区別すること（こ

れを普通 parsing といふ）と、主語・述語・修飾語などに文を分析する」と (analysis といふ) が、主な内容であつた。文学的のものは、殆ど採入されなかつた。

イギリスの国語教育は、一般大衆の生活の向上をまつて、はじめて充実して來たと言ふことが出来る。

イートン、ハローのやうなバブリック・スクール、内至はグラマ・スクールから、オックスフォード、ケンブリッヂに續く、昔からの、いはば上流支配階級の教育系統に対して、公立小学校から公立中学校を経て、近代的大学（ロンドン大学のやうな）に續く、一般大衆の教育系統が確立されたのは、十九世紀末から廿世紀にかけてであつた。この頃になって、国語ははじめて、学校カリキュラムの中に、重要な地位を占めるやうになつた。公立中学校の主な教科目は、英語、近代外国语、歴史、地理、数学、自然科学、図画、音楽、体育といふことになつた。

廿世紀になつて、国語教育の内容が改善されるやうになつたきつかけは、からである。新制度によつて、教養の乏しい家庭の子弟が、毎年相当数、小学校から奨学金を得て、中学校に入学して來るやうになつた。今まで気が付かないでゐたことだが、からなつてはじめて、母国語による文学的な訓練の必要が、痛感されて來たのである。そこで、小学校及び中学校に於ける 国語の範囲及び教授法が再検討され、種々の改革が提案された。

中でも、口頭作業を重視すること、優れた文学的内容をもつ図書を充分に供給すること、などが力説され、漸次、実行に移された。例へば、一九〇九年には、ロンドンでは、四万部の図書を各小学校に回覧せしめる施設が計画された。

口語としての英語を重視するやうになつたのも、著しい進歩である。音声学方面的研究も、これに資するところ大であった。今日では、殆どすべての小学校教育を卒へた者が、標準語を正しく発音することができる。

第二次世界大戦の終り頃、一九四四年、民主主義的な線に沿つて、教育の大改革が行はれた。その教科内容はつゝて、確かにし得ないのは遺憾であるが、国語教育が益々重要視されてゐることには、疑ひの余地がない。

たゞ、問題は実績である。新しい教育法によつて、イギリスの子供達は、明確な表現力を身に付けたであらうか。詩文の解釈力はどうであらうか。又、論理的な思考力は養はれたであらうか。

答へば、否定に傾いてゐるやうである。恐らく、どこの国でも同じことであらう。「中学校を出ても、満足に手紙一本書けない」かういふ歎息や悲難が、各方面から聞えてくる。最近のタイムズ教育附録に寄せられた国語教師の論文には、ある中学生が、三十分もかゝつて書いた十行程の、「天気予報」と題する作文の、冒頭の数行を引用しづる。

With the aid of weather stations in many parts of the world manned by highly skilled scientists, who collect data on weather conditions around their particular area, this is done with the aid of many instruments.

「かく、かく、や情ない生徒に對し」と、この困難の先生は失望している。推敲の大切なこと、推敲の仕方などを、如何に教へるかかを論じ、教室に於ける共同作業の効果を説いて、自分の試み

が成功したことを語つてゐる。また共同作業によつて、韻文を作らせて経験を語り、さうして出来た二三の詩を紹介してゐる。

とあれ、イギリス人は抽象的な理論をふらかせない。行為当たり式に処理して行くことに妙を得てゐる。国語の教育法も、こゝに掲げたやうな教育者達の手によつて、徐々に改善され行くであらう。

イギリスの国語教育をながめて、われへに今すぐ役立つやうな、妙らしいアイディアはなさそうであるが、一つだけ筆者がよいと思つてゐることがある。それは、小学校から大学まで、詩文の誦誦を重視してゐることだ。ケンブリッヂ大学の英文学の試験でも、「詩人……を誦せよ」といふ課題が出るが、正確な詩句の引用について論述した答案でなければ通らないと云はれてゐる。かつて、東大に英文学を講じてゐた詩人批評家エンブソン氏は、イギリスへの帰路、中国の大学で講義を行つたが、一冊の詩集もなかつたので、暗記してゐる章句を板書しつゝ、講義したといふ。先だつてまでゐたフレーザー氏についても、同氏がよく古今の詩文を暗誦してゐるのに、皆驚かされたといふ。実は、それがイギリスの学風であらう。図書五経の素説をやつた祖先をもつたわれへも、この辺を少しあねじ見たひらうであらうか。

—大阪大学教授—